研　究

妊産婦のQOLの縦断的研究

野原真理

〔論文要旨〕

本研究では，「妊産婦のQOLスケール」を用いて，妊産婦のQOLを縦断的に明らかにすることを目的として，都内産科に通院し母親学級に参加した初産婦に，妊娠後期，生後1か月，6か月，12か月に郵送法による質問紙調査を行った。すべてに回答が得られた121名を分析対象とした。QOLの構造について因子分析を行ったところ12項目を3因子で捉えることができ，心理ポジティブ因子では，母親としての充実感や生活の楽しさが，児が成長するにつれて高まっており，物的生活因子では，特に住まいの満足感は生活の活動範囲に影響され生後1か月，12か月で低くなった。日常生活因子では，出産後に食事と睡眠の満足感が高くなるが，友人知人との交流の満足感は徐々に減少することが明らかになった。

妊娠育児の経過に対応した妊産婦のQOLを評価することにより，妊産婦の状況を踏まえた支援につながることが示唆された。

Key words：妊産婦，QOL，縦断的研究

Ⅰ．緒　　言

都市化，核家族化，女性の社会進出が進む中で，女性が子どもをもつことに対してさまざまな選択ができるようになった。しかし，妊産婦においては，急激な心身の変化と母親になるという新たな役割を認識し，アイデンティティを再形成していくことが求められ，極めてストレスフルな状況にあると言われている[1,2]。特に，初産婦は妊娠・出産・育児が初めての経験であり，近い将来に起こりうる事態への不安が大きく，そのQuality of life（以下QOL）を維持・向上することが必要となる。これまでの妊産婦のQOL研究では，妊娠・母親としての満足感[3~6]や抑うつ・育児ストレス[7,8]，自己効力感[9]等，心理・社会的なものが多く，生活全体を捉えた研究はあまり見当たらない。その中で，林ら[10]は，母親の生活状況を全体的に評価する44項目からなる独自の「育児とQOL調査票」を作成し，同QOL尺度が9つの下位尺度から構成されることを明らかにしている。しかし，妊婦への活用は困難であった。そこで著者は先行研究において，Well-being，食事，睡眠，生活環境，経済，社会的機能，母親役割受容の7領域からなる「妊産婦のQOLスケール」[11]を作成した。同一のスケールで，出産を基軸としその前後の妊娠後期（妊娠20週以降）・生後1か月・生後6か月（以下妊娠育児3時期）において，妊産婦のQOLが測定可能であり，すでに信頼性および妥当性が検証されている。

ところで，1歳児（12か月児）をもつ母親のQOLは，どのように構成され変化しているのであろうか。服部[12]によれば「乳児期は他者（主に母親）に依存し，

A Longitudinal Study on Quality of Life in Pregnant Women and Nursing Mothers　〔2311〕

Mari NOHARA
つくば国際大学医療保健学部看護学科（保健師／研究職）

受付 11. 2.14
採用 12. 8.27

別刷請求先：野原真理　つくば国際大学医療保健学部看護学科　〒300-0051 茨城県土浦市真鍋6-8-33
Tel：029-826-6622　Fax：029-826-6776

Presented by Medical*Online

他者に生命も委ねていたが，1歳になる頃より離乳にはじまる母親からの離脱が起こり，母親と自分とは互いに異なる個体であるという認識が徐々に深まる」と述べている。児はよちよち歩きが可能となり，周囲の世界に多大な興味を示すようになる。一方，母親にとっては，児との意思疎通が可能となり活動範囲がさらに広がる中で，児との距離のとり方や食事，排泄，睡眠等しつけの課題が現れる時期である。また母親の中には，育児休暇を経て，復職するケースも出てくると見られ，生活に変化が現れることも予測された。そこで本研究では，「妊産婦のQOLスケール」[11]を用いて，これまでの妊娠育児3時期に1歳時を加えた（以下妊娠育児4時期）妊産婦のQOLを縦断的に明らかにすることを目的とした。

Ⅱ．研究方法

1．対象および調査方法

本研究の対象は，都内私立病院産科に通院している初妊婦で，妊娠後期の調査は，平成18年6～9月に開催された3回目の母親学級受講者を対象とした。母親学級終了後に，著者が調査の主旨および内容とプライバシー遵守を説明し，調査協力は任意であること，途中辞退も可能であることを口頭および文書で伝えた。そして，その場で調査票と同意書を配布し自宅に持ち帰ってもらい，調査票と同意書を一緒に郵送法にて回収した。生後1か月，6か月の調査も郵送法にて行った。生後6か月の第3回目調査時に新たに1歳時での調査の協力を求め，返信で同意が得られた124名に対して1歳を目途に調査票を郵送した。回収数は124名（回収率100%），その中で，記入に不備があった1名を除き，さらに妊娠育児4時期すべてに回答が得られた121名を分析対象とした。なお，妊娠後期調査時の平均妊娠週数は32.1±1.9週，同様に生後1か月は41.4±11.3日，生後6か月は190.3±9.3日，1歳は360±8.9日，調査期間は平成18年6月～同19年12月であった。

表1　基本的属性

			妊娠後期	生後1か月	生後6か月	生後12か月
年齢	対象者	歳（SD）	31.4（4.3）	—	—	32.2（4.2）
		年齢範囲	（23～43歳）			（24～44歳）
	夫	歳（SD）	33.5（5.3）	—	—	34.5（5.5）
		年齢範囲	（23～48歳）			（24～49歳）
就業状況	対象者	なし　実数（%）	56（46.3）	56（46.3）	74（61.2）	75（62.0）
		育児休暇中	65（53.7）	65（53.7）	35（28.9）	16（13.2）
		就業	0（0.0）	0（0.0）	12（9.9）	30（24.8）
	夫	就業　実数（%）	121（100.0）	121（100.0）	121（100.0）	121（100.0）
家族構成	核家族		118（97.5）	118（97.5）	118（97.5）	118（97.5）
	複合家族		3（2.5）	3（2.5）	3（2.5）	3（2.5）
児の状態	良好		117（96.7）	117（96.7）	117（96.7）	119（98.3）
	経過観察中		4（3.3）	4（3.3）	4（3.3）	2（1.7）
夫の帰宅時刻	～19時		2（1.7）	2（1.7）	2（1.7）	2（1.7）
	19～20時前		12（9.9）	11（9.0）	12（9.9）	14（11.6）
	20～21時前		25（20.6）	26（21.5）	24（19.8）	20（16.5）
	21時～		79（65.3）	79（65.3）	78（64.5）	80（66.1）
	その他		3（2.5）	3（2.5）	5（4.1）	5（4.1）

注）帰宅時刻は1週間の平均値
注）帰宅時刻のその他：変則勤務，単身赴任等

Presented by Medical*Online

2．調査内容

質問紙は，先行研究[11]に準じて1歳児においても同一内容とし，特に生後1か月時，生後6か月時と同じ表記で実施した。

1）基本的属性

妊産婦・夫の年齢，家族構成，妊産婦・夫の就業状況，夫の帰宅時刻等である。

2）QOL

「妊産婦のQOLスケール」[11]の12項目とした。Well-being領域は「今の生活は楽しい」，「今の生活は満足している」，食事領域は「食事はおいしく食べている」，睡眠領域は「よく眠れている」，生活環境領域は「周りの生活環境に満足している」，「今の住まいについて満足している」，経済的領域は「今の経済状態に満足している」，社会的機能領域は「友人知人との交流は多い方だと思う」，母親役割受容領域は「母親になったことで人間的に成長できていると思う」，「母親になったことに生きがいを感じている」，「母親になったことで気持ちが安定していると思う」，「母親になったことに充実感を感じる」である。選択肢は各設問共通に「全くそのとおりである」，「そのとおりである」，「そうでない」，「全くそうでない」の4段階とし，前者から3点，2点，1点，0点と得点化した。実施方法として，回答時（妊娠育児4時期）にもっとも当てはまる状態を選んでもらった。

3．分析方法

QOLの構造分析については，設定した12項目について主因子法バリマックス回転による因子分析を行った。スケールの信頼性はCronbach's α係数により検討した。またQOL項目別因子得点の比較は，対応したサンプルのt検定を行い，就業と夫の帰宅時刻によるQOLへの影響については，独立したサンプルのt検定を行った。統計解析ソフトには「SPSS Ver11.5」を用いた。

Ⅲ．結　　果

1．基本的属性

生後12か月時の対象者の平均年齢は32.2±4.2歳（範囲24～44歳），夫の平均年齢は34.5±5.5歳（範囲24～49歳）であった。就業状況は，就業が30名（24.8%），育児休暇中が16名（13.2%），専業主婦が75名（62.0%）であった。夫は全員就業しており，平日帰宅時刻は平均21時26分±10.2分（範囲18～25時），休日は週平均1.74±0.5日（範囲0～2日）であった。核家族が118名（97.5%）で，子どもの発育・発達状態は119名（98.3%）が良好であった（**表1**）。

表2　QOLの因子分析結果（因子負荷量）

（主因子法による）n=121

	妊娠後期			生後1か月			生後6か月			生後12か月		
	第1因子（心理ポジティブ因子）	第2因子（物的生活因子）	第3因子（日常生活因子）	第1因子（心理ポジティブ因子）	第2因子（物的生活因子）	第3因子（日常生活因子）	第1因子（心理ポジティブ因子）	第2因子（物的生活因子）	第3因子（日常生活因子）	第1因子（心理ポジティブ因子）	第2因子（物的生活因子）	第3因子（日常生活因子）
妊婦（母親）充実感	0.829	0.193	0.201	0.776	0.112	0.350	0.796	0.175	0.273	0.901	0.148	0.097
生活の楽しみ	0.808	0.342	0.056	0.521	0.092	0.609	0.517	0.109	0.620	0.686	0.402	0.163
生活の満足感	0.737	0.393	0.208	0.541	0.223	0.633	0.561	0.164	0.573	0.677	0.480	0.143
気持ちの安定感	0.724	0.102	0.325	0.694	0.152	0.290	0.646	0.173	0.249	0.695	0.256	0.330
妊婦（母親）生きがい感	0.636	0.119	0.321	0.894	0.107	0.141	0.740	0.152	0.233	0.826	0.222	0.054
妊婦（母親）成長感	0.303	−0.001	0.559	0.599	0.243	0.189	0.563	0.122	0.126	0.573	0.229	0.126
住まいの満足感	0.230	0.805	0.080	0.174	0.680	0.110	0.246	0.900	0.078	0.244	0.642	0.020
環境の満足感	0.241	0.740	0.284	0.084	0.873	0.184	0.176	0.690	0.276	0.110	0.677	0.004
経済の満足感	0.105	0.263	0.326	0.268	0.353	0.374	0.114	0.452	0.431	0.169	0.534	0.246
友人知人との交流状況	0.047	0.100	0.487	0.181	0.239	0.385	0.133	0.258	0.493	0.220	0.393	0.103
おいしい食事	0.165	0.268	0.470	0.197	0.195	0.667	0.269	0.129	0.588	0.439	0.119	0.288
十分な睡眠	0.180	0.031	0.215	0.134	0.026	0.573	0.133	0.102	0.521	0.218	0.126	0.891
寄与率	25.7%	14.0%	10.9%	25.0%	17.8%	13.5%	22.5%	17.1%	14.3%	30.2%	16.0%	9.4%
累積寄与率	25.7%	39.7%	50.6%	25.0%	42.8%	56.3%	22.5%	39.6%	53.9%	30.2%	46.2%	55.6%

注1）Cronbach's α係数0.85　注2）Cronbach's α係数0.88　注3）Cronbach's α係数0.87　注4）Cronbach's α係数0.87

Presented by Medical*Online

2．QOL

1）QOL 各項目の得点分布

各項目の回答は0～3点の範囲にあり，平均得点は1.83～2.58，標準偏差は0.56～0.86の範囲にあり，すべて正規性が認められた。

2）QOL 構造の信頼性の検討

構成概念の妥当性検討のため固有値1以上で因子分析を行ったところ，設定した12項目から妊娠育児4時期共通の3因子が抽出された。ただし，「生活の楽しみ」については，生後1か月，生後6か月では，第3因子での因子負荷量が第1因子での値よりわずかに高いのみであることから，妊娠後期に準じ第1因子に含めた。同様の手順により，「生活の満足感」，「妊婦（母親）成長感」は第1因子に，「経済の満足感」は第2因子に含めることにした。また1歳（生後12か月）時の「おいしい食事」については，第1因子での因子負荷量が第3因子での値よりわずかに高いのみであることから，妊娠育児3時期に準じ第3因子に含め，同様に「友人知人との交流状況」は第3因子に含めることにした。累積寄与率は妊娠育児4時期とも約50％以上であり，第1因子（6項目）は「心理ポジティブ因子」，第2因子（3項目）は「物的生活因子」，第3因子（3項目）は「日常生活因子」と命名した（**表2**）。

Cronbach's α係数は，スケール全体では妊娠後期が「0.85」，生後1か月が「0.88」，生後6か月が「0.87」，生後12か月（1歳）が「0.87」（**表2**），また因子別では「心理ポジティブ因子」が「0.89～0.90」，「物的生活因子」が「0.68～0.77」，「日常生活因子」は「0.57～0.61」といずれも整合性が高かった。

3）時系列にみた QOL 項目別因子得点

妊産婦の QOL の変化を見るために，妊娠育児4時期で比較した（**表3**）。

(1) 妊娠後期と生後1か月

生後1か月では妊娠後期と比較して，心理ポジティブ因子全体では平均値の差が見られないが，項目別では「母親としての充実感」，「生活が楽しい」，「生活の満足感」が有意に低くなり，「母親としての生きがい感」と「成長感」が高くなった。同様に物的生活因子も全体では有意差は見られないが，項目別では「住まいの満足感」が有意に低くなり，「環境の満足感」と「経済の満足感」は高くなった。一方日常生活因子全体では有意に高くなった。項目別では「おいしい食事」と

表3　ＱＯＬ項目別因子得点（平均値）

平均値（SD）n=121

	心理ポジティブ（第1因子）			物的生活（第2因子）			日常生活（第3因子）		
妊娠後期	母親充実感	1.99（0.60）		住まいの満足感	1.68（0.69）		おいしい食事	1.18（0.30）	
	生活の楽しみ	1.91（0.59）		環境の満足感	1.55（0.56）		十分な睡眠	0.41（0.19）	
	生活の満足感	1.75（0.52）		経済の満足感	0.54（0.20）		友人知人との交流状況	0.90（0.38）	
	気持ちの安定感	1.42（0.62）							
	母親生きがい感	1.41（0.50）							
	母親成長感	0.65（0.23）							
	心理ポジティブ因子	9.15（2.51）		物的生活因子	3.77（1.22）		日常生活因子	2.55（0.60）	
生後1か月	母親充実感	1.80（0.60）	（妊：1）** ↓	住まいの満足感	1.30（0.63）	（妊：1）** ↓	おいしい食事	1.70（0.40）	（妊：1）** ↑
	生活の楽しみ	1.24（0.38）	（妊：1）** ↓	環境の満足感	1.74（0.77）	（妊：1）** ↑	十分な睡眠	0.90（0.48）	（妊：1）** ↑
	生活の満足感	1.25（0.38）	（妊：1）** ↓	経済の満足感	0.72（0.62）	（妊：1）** ↑	友人知人との交流状況	0.72（0.28）	（妊：1）** ↓
	気持ちの安定感	1.35（0.56）	（妊：1）ns						
	母親生きがい感	2.04（0.67）	（妊：1）** ↑						
	母親成長感	1.36（0.44）	（妊：1）** ↑						
	心理ポジティブ因子	9.03（2.50）	（妊：1）ns	物的生活因子	3.75（1.39）	（妊：1）ns	日常生活因子	3.31（0.88）	（妊：1）** ↑
生後6か月	母親充実感	1.95（0.51）	（1：6）* ↑	住まいの満足感	1.82（0.83）	（1：6）** ↑	おいしい食事	1.55（0.31）	（1：6）ns
	生活の楽しみ	1.35（0.29）	（1：6）** ↑	環境の満足感	1.47（0.58）	（1：6）** ↓	十分な睡眠	0.96（0.49）	（1：6）ns
	生活の満足感	1.36（0.38）	（1：6）* ↑	経済の満足感	0.90（0.37）	（1：6）* ↑	友人知人との交流状況	1.00（0.36）	（1：6）ns
	気持ちの安定感	1.37（0.48）	（1：6）ns						
	母親生きがい感	1.38（0.35）	（1：6）** ↓						
	母親成長感	1.35（0.33）	（1：6）ns						
	心理ポジティブ因子	8.75（2.50）	（1：6）ns	物的生活因子	4.18（1.51）	（1：6）* ↑	日常生活因子	3.51（0.87）	（1：6）ns
生後12か月	母親充実感	2.28（0.55）	（6：12）** ↑	住まいの満足感	1.36（0.55）	（6：12）** ↓	おいしい食事	0.74（0.16）	（6：12）** ↓
	生活の楽しみ	1.73（0.41）	（6：12）** ↑	環境の満足感	1.50（0.50）	（6：12）ns	十分な睡眠	1.64（0.75）	（6：12）** ↑
	生活の満足感	1.59（0.50）	（6：12）** ↑	経済の満足感	1.10（0.45）	（6：12）** ↑	友人知人との交流状況	0.20（0.37）	（6：12）** ↓
	気持ちの安定感	1.52（0.56）	（6：12）* ↑						
	母親生きがい感	1.98（0.35）	（6：12）** ↑						
	母親成長感	1.37（0.37）	（6：12）ns						
	心理ポジティブ因子	8.87（2.07）	（6：12）ns	物的生活因子	3.97（1.17）	（6：12）ns	日常生活因子	2.59（0.85）	（6：12）ns

注1）検定は対応のある t 検定による。* $p < 0.05$　** $p < 0.01$　ns：有意差なし
注2）検定は妊娠後期 VS 生後1か月（妊：1），生後1か月 VS 生後6か月（1：6），生後6か月 VS 生後12か月（6：12）で行った
注3）月齢が上がるにつれて，平均値が上がった項目：↑，平均値が下がった項目：↓

Presented by Medical*Online

「十分な睡眠」が有意に高くなり,「友人知人との交流」は低くなった。

(2) 生後1か月と6か月

生後6か月では1か月と比較して，心理ポジティブ因子全体では平均値の差が見られないが，項目別では「母親としての充実感」,「生活が楽しい」,「生活の満足感」が有意に高くなり,「母親としての生きがい感」は低くなった。一方物的生活因子全体は有意に高くなり，項目別では「住まいの満足感」,「経済の満足感」が有意に高くなり,「環境の満足感」が低くなった。日常生活因子は全体，項目別でも有意差がなかった。

(3) 生後6か月と12か月

生後12か月では6か月と比較して，心理ポジティブ因子全体では平均値の差が見られないが，項目別では「母親としての充実感」,「生活が楽しい」,「生活の満足感」,「気持ちの安定感」,「生きがい感」が有意に高くなった。同様に物的生活因子も全体では有意差は見られないが，項目別では「住まいの満足感」が有意に低くなり,「経済の満足感」は高くなった。日常生活因子全体も有意差が見られないが，項目別では「十分な睡眠」が有意に高くなり,「おいしい食事」,「友人知人との交流」は低くなった。

4) 就業とQOL因子得点

母親の就業（復職）が見られた生後6か月と12か月（1歳）時について母親のQOLとの関連性を分析したところ，生後6か月では就業あり群と就業なし群では12項目の平均値には差は見られなかった。しかし生後12か月では「母親としての生きがい」が，就業なし群での平均点が有意に高かった（表4）。

5) 夫の帰宅時刻とQOL因子得点

夫の帰宅時刻とQOLとの関連性について，21時を分割値として帰宅早い群と遅い群で比較したところ，妊娠育児4時期すべてに有意差は見られなかった。

Ⅳ. 考　　察

1. 対象特性について

今回の調査対象は，都心に居住し病院の産科に通院する初産婦のうち，調査に同意が得られた者であり，基本的属性からみると対象者の児が1歳時の平均年齢は32.2歳で，出産時年齢を1歳差し引いて算出すると全国値（平成18年の第1子出生平均年齢は29.2歳）[13]と比較してやや高めであり，ほとんどが核家族である。また妊娠育児4時期の調査に協力が得られた母親であり，調査への理解が高い層での結果であるとも考えられる。

表4　就労の有無とQOL因子得点

平均値（標準誤差）　n=121

	生後6か月					生後12か月				
	就労あり（12名）		就労なし			就労あり（30名）		就労なし		
母親充実感	1.99	(0.18)	1.94	(0.05)	n.s	2.13	(0.12)	2.33	(0.06)	n.s
生活の楽しみ	1.34	(0.13)	1.35	(0.03)	n.s	1.65	(0.07)	1.76	(0.04)	n.s
生活の満足感	1.26	(0.17)	1.37	(0.03)	n.s	1.53	(0.97)	1.61	(0.05)	n.s
気持ちの安定感	1.40	(0.13)	1.37	(0.04)	n.s	1.44	(0.11)	1.54	(0.06)	n.s
母親生きがい感	1.36	(0.13)	1.37	(0.05)	n.s	1.79	(0.13)	2.04	(0.05)	*
母親成長感	1.36	(0.11)	1.35	(0.03)	n.s	1.34	(0.69)	1.38	(0.04)	n.s
住まいの満足感	1.88	(0.26)	1.81	(0.08)	n.s	1.26	(0.99)	1.40	(0.05)	n.s
環境の満足感	1.38	(0.19)	1.48	(0.06)	n.s	1.47	(0.08)	1.51	(0.05)	n.s
経済の満足感	0.98	(0.13)	0.89	(0.03)	n.s	1.07	(0.89)	1.11	(0.05)	n.s
友人知人との交流状況	0.90	(0.15)	1.01	(0.03)	n.s	0.17	(0.02)	0.20	(0.01)	n.s
おいしい食事	1.52	(0.17)	1.55	(0.03)	n.s	0.73	(0.03)	0.75	(0.02)	n.s
十分な睡眠	0.91	(0.15)	1.64	(0.05)	n.s	1.66	(0.15)	1.64	(0.08)	n.s

* $p < 0.05$，n.s 有意差なし

Presented by Medical*Online

また調査時に，就業している人が約2割で，育児休暇中の母親を含めて子どもが1歳時は8割近くが家庭で育児に専念していることが示された。しかし核家族の重要なサポート要員と考えられる夫の平日の帰宅時刻は21時を過ぎる家庭が約7割であり，平日のサポートは得にくい状況が考えられる。

2．QOLのオリジナルスケールについて

「妊産婦のQOLスケール」[11]を用いて，その評価を試みたところ，3つの下位尺度で説明でき，「心理ポジティブ」,「物的生活」,「日常生活」から構成された。妊娠育児4時期の妊産婦とも尺度全体，下位尺度において高い信頼性（内的整合性）が確認された。同一尺度で妊娠期，育児期にある妊産婦のQOLを測定できるという点で，生活の満足感と母親としての満足感からなる本スケールの活用の可能性が示唆された。

3．時系列にみたQOLについて

1）妊娠後期と生後1か月のQOLの3因子の比較

因子得点の平均値を比較すると，心理ポジティブ因子（第1因子）全体では変化が見られなかったが，項目別では母親としての充実感，生活が楽しい，生活の満足感が低くなり，母親としての生きがい感と成長感が高くなった。花沢[14]の報告によると，妊娠中の育児動機（育児の肯定感）が高い場合，産後の育児動機が高いことが言われているが，今回の結果からその内容は同様ではないことが考えられる。つまり，出産直後から始まる初めての育児は，妊娠中から思い描いていた子どもがいる楽しいだけの生活とは違うといった現実的な感情を母親に抱かせていることが考えられる。しかし一方で児と接する中で母親としての自覚が生まれ，母親としての生きがい感や成長感といったポジティブな感情は高まっており，生後1か月ではアンビバレンスな状態であることも考えられる。

物的生活因子（第2因子）の平均値は，妊娠後期に比べて生後1か月で変化が見られなかったが，項目別では住まいの満足感が低くなり，環境の満足感と経済の満足感は高くなった。これは，生後1か月の時期は，産婦が身体的にも回復途上にあり，家の中での生活が中心と推察される。このような生活空間が限定される状況での初めての育児や子どもの居場所等への配慮が求められることが影響しているものと考えられる。また，育児にあたっての経済面での負担感は，妊娠中にある程度育児用品等の準備が整っており，この時期の負担は軽減されていることが推測される。

一方，日常生活因子（第3因子）の平均値では，妊娠後期に比べて生後1か月で高くなった。生後1か月においては，夜間の授乳等での睡眠不足が考えられるが，1か月をやや過ぎるころから生活リズムへの慣れや食事が問題なく摂取できる可能性が高まることが考えられる。一方，友人知人との交流が低くなったことは，児がいることで母子ともに自由に外出できない状態にあることや時間に余裕がないことが影響していると考えられる。

2）生後1か月と6か月のQOLの3因子の比較

心理ポジティブ因子（第1因子）と日常生活因子（第3因子）の平均値は変化が見られないが，物的生活因子（第2因子）は生後1か月の値に比べて生後6か月の値が高い。心理ポジティブ因子の項目別では，母親としての充実感，生活が楽しい，生活の満足感，気持ちの安定感，生きがい感の増加が見られ，生後6か月になると，育児への慣れや自信，母親としてのアイデンティティを獲得しつつあることが関わっているものと考えられる。そして，前記の妊娠中，生後1か月を通して継続されているポジティブな感情は，生後6か月になると，子どもとの生活の中でさらに強くなっていることが考えられる。山口[6]は，6か月児の特徴について，幼児期以降の子どもと比較して，反応が複雑になっていないとしている。そのため，6か月児を持つ母親は，母親役割についてポジディブに受け止めている母親ほど，育児に対して肯定的・積極的であると説明している。

また，物的生活因子（第2因子）での増加については，生後6か月では，子どもの成長とともに，母親としても余裕ができ，周りの環境をも良好と感じるようになることが考えられる。しかしその中で，環境に対する満足感は低下しており，親子の行動範囲の広がりとともに，公園や緑地といった自然環境や子育て環境の視点が新たに加わったことが影響しているのではないかと推察される。第1回妊娠出産子育て調査報告書[15]によると，妊娠期と比較して0歳時期では，医療施設や公共の子育て支援施設，小児科や子どもを診てくれる病院を意識する傾向が増加すると述べている。対象者は都心に在住し比較的生活に便利な環境にあることが推測されるが，この点が環境への満足感の低下に影響しているとも考えられる。

Presented by Medical*Online

さらに日常生活因子（第３因子）は，食事，睡眠，人との交流といった基本的な生活因子であり，生後６か月は生後１か月と変化がなく子どもを中心とした日常生活が送られていることが考えられる。

3）生後６か月と12か月のQOLの３因子の比較

心理ポジティブ因子（第１因子），物的生活因子（第２因子），日常生活因子（第３因子）の平均値はいずれも変化が見られない。しかし心理ポジティブ因子の項目別では，母親としての充実感，生活が楽しい，生活の満足感，気持ちの安定感，生きがい感の増加が見られ，子どもが１歳を迎える頃には，さらに母親としての自覚も高まり，子どもとの関係性も構築する中で育児に自信がつき，その結果生活自体に満足感を感じていることが考えられる。

一方，物的生活因子の項目別では，住まいの満足感が低くなるが，子どもの活動範囲が広がりスペースの問題や集合住宅での気遣いなどが影響しているのではないかと推察される。前述の調査報告書[15]によれば，「住居の間取りの使い勝手が悪く，家事や育児がしづらい」，「夫婦２人で過ごすスペースを確保するのが難しい」と回答した者が共に４割で，「子どもが遊べるスペースがあまりなくて苦労する」が３割ということで，都心の住宅事情も影響していることが考えられた。経済状況の満足感が増加したことは，出産や育児の始まりにかかる出費が一段落し，さらに夫の収入による生活サイズに慣れてくることが考えられる。また，育児休暇を終えて就業した者の経済的な満足感の増加も考えられるが，そのことについては，さらに標本数を増やした検討が必要である。

また日常生活因子の項目別では，十分な睡眠が高くなっているが，このことは子どもの生活リズムが整い夜間の睡眠がとれるようになったことが影響していると考えられる。しかし食事や友人知人との交流状況に対する満足感は低下しており，生後６か月とは異なる要因を考える必要がある。

外山[16]は，母親にとっての食事時間は，子どもの食事にも気を遣いつつ自分自身の食事を摂るという場面であると述べており，１歳児では離乳食が順調に進んでいること，作った離乳食を残さず食べてくれることなど，子どもの食事に対する満足感が含まれていることが考えられる。他方「友人知人との交流状況」はどうであろうか。この項目は妊娠後期から社会的機能領域として尋ねてきた設問であるが，妊産婦の交流関係が妊娠・出産・育児をとおして変化してきていることが考えられる。つまり非妊娠時の交流は学生時代の友人，職場関係の知り合い，趣味の仲間等が推測されるが，子どもが１歳ともなると，子育てをとおしての人間関係が広がってくることが考えられる。このことは，母親がこれまで所属していた場，すなわち学校，職場という特定集団の中での人間関係だけではなく，住んでいる環境の中で同じく子育てをしている母親との交流が重要視されるためと解釈できる。しかしそれはあくまでも育児をとおしての交友関係であり，非妊娠時の「友人知人との交流状況」が限定され縮小したと認識されたとも考えられる。子育て中の母親が感じる社会からの疎外感は，このような感情から生じているのかもしれない。

4．就業や夫の帰宅時刻とQOLについて

母親の就業の有無とQOLとの関連性では，生後６か月では関連がみられなかった。就業している者が12名と少数であったことや，就業して間もないことが影響しているものと考えられる。しかし生後12か月では仕事を持たない者は仕事を持っている者と比較して子育てが生きがいとなっていることが示された。濱田[17]は仕事と家庭の多重役割が母親の意識に及ぼす影響として，日常生活の充実感や満足感といった肯定的な意識と役割葛藤によるネガティブな感情があることを指摘している。本研究では肯定的なポジティブな側面に注目しているが，ネガティブな側面についても今後検討していく必要性があると考える。

また，夫の帰宅時刻とQOLとの関連性では，妊娠育児４時期すべてにおいて，21時以降の帰宅の遅い群であってもQOLに差が見られないことが示された。このことは，単に夫の帰宅時刻が遅いという物理的な制約では妊産婦のQOLが影響されないことを意味している。また一方で夫の就業によって家族の生活自体が支えられているということも事実であり，夫に対しては，休日のサポートや平日でも妊産婦の相談に応じたり，大変な育児を理解するといった精神的なサポートも重要であり，妊産婦がそれを期待していることも考えられる。

就業や夫のサポートが妊産婦のQOLに影響するかどうかについてはさらなる継続した調査が必要であると考える。

Presented by Medical*Online

V．結　　語

本研究では，初産婦のQOLを「妊産婦のQOLスケール」を用いて縦断的に調査し，共通の3因子で捉えることが可能なことが明らかになった。つまり心理ポジティブ因子では，母親としての充実感や生活の楽しさが，生後6か月，12か月と児が成長するにつれて高まり，物的生活因子では，特に住まいの満足感は母子の生活の活動範囲に影響され生後1か月，12か月で低くなった。日常生活因子では，出産後に食事と睡眠の満足感が高くなるが，友人知人との交流の満足感は徐々に減少することが明らかになった。

妊娠育児の経過に対応した妊産婦のQOLを評価することにより，妊産婦の状況を踏まえた支援につながることが示唆された。

謝　辞

本研究を進めるにあたり，多大なご協力をいただきました対象者の皆様に深く感謝いたします。

文　　献

1) 眞鍋えみ子，清水尚子，松田かおり，他．妊娠中のセルフケア行動が出産体験の自己評価に及ぼす影響．京都府立医科大学看護学部紀要　2005；14：7-42.
2) 伊藤道子．妊娠期から産褥期までの女性の心理・社会的状態とソーシャルサポート．北海道医療大学看護福祉学部紀要　2006：13：1-9.
3) 大日向雅美．母性の研究―その形成と変容の過程-伝統的母性観への反証―．東京：川島書店，1988：135-169.
4) 宮中文子，松岡和子，新道幸恵，他．周産期における母性意識の発達過程とマタニティーブルーとの関連性―産褥期における調査―．日本助産学会誌　1994；8：32-41.
5) 岡山久代．妊婦の胎児への愛着に対する実母ならびに夫との関係の影響．日本看護研究学会雑誌　2002；25（5）：15-25.
6) 山口孝子，堀田法子．6か月児をもつ母親の精神状態に関する研究（第3報）―子どもに対する感情および母親役割の受容との関連から―．小児保健研究　2005；64（6）：752-759.
7) 池田浩子．育児負担感に関する研究―育児負担感の時期別変化と母親の心理状態との関連―．母性衛生　2001；42（4）：607-614.
8) 大村いづみ．妊娠・産褥期における母性意識と抑うつ状態について．名古屋市立大学看護学部紀要　2003；3：23-27.
9) 島田啓子，亀田幸枝，笹川寿之，他．妊婦の出産に対するSelf-Efficacy Scaleの開発に関する研究（1）―信頼性と妥当性の検討―，金沢大学医学部保健学科紀要　2000；24（1）：61-68.
10) 林田りか，濱　耕子，小林美智子．看護におけるQOL．公衆衛生研究　2004；53（3）：209-217.
11) 野原真理，宮城重二．妊産婦のQOLと親族サポートの関連性．日本公衆衛生雑誌 2009；56（12）：849-862.
12) 服部祥子．生涯人間発達論．東京；医学書院，2004：29-33.
13) 厚生統計協会．国民衛生の動向．2008；45-46.
14) 花沢成一．母性心理学（第1版）．東京；医学書院，2003：101-103.
15) 松本聡子．子育の物理的環境．第1回妊娠出産子育て基本調査・フォローアップ調査．東京；ベネッセ次世代育成研究所，2009：54-61.
16) 外山紀子．食事場面における1～3歳児と母親の相互交渉：文化的な活動としての食事の成立．発達心理学研究　2008；19（3）：232-242.
17) 濱田維子．仕事と家庭の多重役割が母親の意識に及ぼす影響．日本赤十字九州国際看護大学紀要　2005；3：147-158.

〔Summary〕

This study confirmed the Quality of Life (QOL) in pregnant women and nursing mothers by way of developing a scale of QOL. A self-administered questionnaire was distributed four times by mail to the women attending a maternity class in an urban hospital, during late pregnancy and one month and six months and 12 months after birth (n ＝121). The QOL scale was originally used with twelve items, revealing three factors："positive feeling", "contentment with physical environment and financial situation (surrounding factors)", and "satisfaction with lifestyle and relationships (daily life)". "Positive feeling", the sense of fulfillment as a mother and the pleasure of the life increased by degrees in the period, and "surrounding

Presented by Medical*Online

factors", especially the satisfaction of a home was influenced by the sphere of activity of a life, and became low in one month after the birth and 12 months. "Daily life", although the satisfaction of a meal and sleep became high after childbirth, it was possible that the satisfaction of the exchange with a friend acquaintance decreases gradually. The original scale of QOL was possible to grasp the meaning of three factors, and certified to be good for estimation of their QOL.

〔Key words〕
pregnant women and nursing mothers, QOL, longitudinal study

Presented by Medical*Online